

記 入 例

死後 CT により全身性骨転移巣の存在が明らかとなった一部検例

飯野守男¹⁾, XXXX²⁾

1) 慶應義塾大学医学部法医学教室, 2) XXXX大学大学院医学系研究科XX医学教室

An autopsy case of systemic bone metastases revealed by postmortem imaging

Morio Iino¹⁾, XXX XXXX²⁾

1) Department of Legal Medicine, Keio University School of Medicine

2) Department of xxxx, xxxx University Graduate School of Medicine

【はじめに】

法医解剖前に CT 撮影を行うことにより、剖検では発見しづらい異物や病変が同定され、その後の剖検をより精密かつ正確に行うことができることがある。さらに、死因のみならず死因の種類に関する診断においても、画像所見が重要な役割を果たす場合がある。

〇〇〇〇〇.

.

.

.

.

【症例】

〇〇代男性。某日、〇〇.

.

.

.

.

.

〇〇〇〇〇.

男性は約 1 年前から前立腺癌の治療を受けていることが判明した。

【死後 CT 所見】

頸椎、胸椎、腰椎、肋骨および骨盤に多数の高吸収領域を認める。

頭部には.

【主要解剖所見】

〇〇.

.

【組織学的所見】

骨に.

【考察】

以上から、〇〇.

.

.

.

.

死後 CT 画像が死因の種類判断の一助となった事案である。

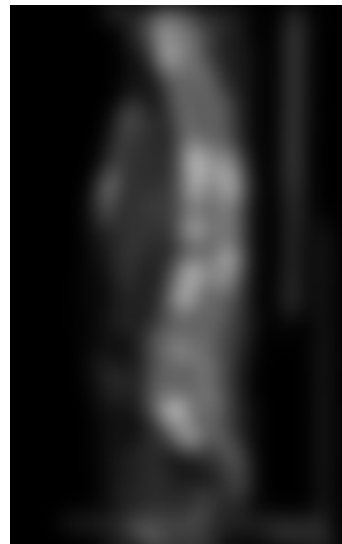


図 1 椎体

[Abstract]

Postmortem imaging of a male patient with head injury revealed systemic metastases of the bones. The original cancer site was thought to be the XX.